宮城県支部

幹事　**髙木　康守**（昭和60年園芸学科卒）

平成28年6月12日にホテル白萩で第9回総会・講演会・懇親会を32名の参加者で開催しました。

総会では、平成27年度事業報告と決算、平成28年度事業計画と予算案、役員改選の3議案すべて承認されました。役員改選では支部長に富樫千之さん（昭和51年農工卒）、副支部長に及川浩好さん（昭和53年農化卒）、監事に郡山賢一さん（昭和48年農化卒）、梁川勝夫さん（昭和51年農学卒）が選任されました。

その後は、株式会社キノックス代表取締役郡山賢一さん（昭和48年農芸化学科卒）から「きのこ産業界の現状と我が社の今後の取り組みについて」をテーマに講演いただきました。

全員で記念撮影後懇親会を開催、鶴窓会佐藤晨二会長から祝辞、会員の近況報告などで大いに盛り上がり名残惜しい中閉会となりました。平成29年6月11日開催予定の総会は第10回の節目となりますのでより多くの会員のみなさまの参加をお待ちしております。

宮城県支部総会　平成28年6月12日（日）　於：ホテル白萩

関西支部

関西支部事務局

第10回鶴窓会関西支部総会は10月1日（土）17時より大阪市東心斎橋「割烹湖月」で、本部から佐藤会長、校友会から黒沼氏らのご出席をいただき17名の出席のもと開催されました。

関西支部は10回目を向かえ二回から10回までの皆勤者へ感謝状の贈呈式が行われました。（会員の声11ページ参照）

来賓ご案内／種市参与
受付／岡事務局長
1.総司会　古川幹事
2.ご挨拶と経過報告（安富支部長）
3.学園周辺（松田技術参与）
4.懇親会Ⅰ（司会西村幹事）
乾杯（中村隆夫氏、長澤ゆかり氏）
初参加者紹介（岡事務局長）
歌・山形県民謡（庄内おばこ他）
5.来賓紹介・ご挨拶（司会種市参与）
鶴窓会本部会長（佐藤晨二氏）
校友会本部代表（黒沼宏成氏）
県事務所長（渡辺亘氏）
県人会代表（畑谷誠二氏）
ふすま同窓会代表（里村義征氏）
米沢工業会代表（吉田信明氏）
6.懇親会Ⅱ（西村参与）
寮歌・遊遙歌・校歌
7.写真撮影（松田参与）
8.お願い（岡事務局長）
9.閉会（畑参与）

今宵は本部より贈られた地酒も加わって、来賓の方々も交わり学友（先輩・同輩・後輩）と山形の青春時代にタイムスリップ、深夜までおおいに語り合い、謳歌し、来年の再会を誓った。

関西支部総会　平成28年10月1日（土）　於：割烹湖月

関東支部

幹事　**奥泉　久人**（昭和61年林学科卒）

6月5日（午後1時～5時20分）に東京都港区芝浦の山形大学東京サテライトで開催されました。来賓として鶴窓会本部副会長菅原幸司さん（49年卒）、地域教育文化学部同窓会蜂谷義雄さん（28年卒）、米沢工業会東京支部幹事長船越巧子さん（46年卒）、山形大学校友会大沼一男さん（51年卒）を迎えて合計38名が参加しました。

総会は、事務局眞嶋敏晴さん（43年林学科）の司会により、副代表山本千秋さん（31年林学）の開会の辞に続き、代表岩城功希さん（38年農工）の挨拶、会計安田明雄さん（63年農工）の会計報告、監事鈴木晴夫さん（39年農学科）の監査報告、新代表の山本さんはじめ新役員の選出、眞嶋さんから本部代議員会報告、会員状況、事務局報告など順当に進行し、副代表三宅義則さん（45年農化科）の閉会の辞で予定時間内に終りました。

講演会では、「ダダチャマメの注目すべき機能成分について」と題して、山形大学客員教授阿部利徳先生から興味深いお話を伺い、ダダチャマメの偉大さに思いをはせました。その後、出席者全員で記念写真撮影をして懇親会（ニュー・トーキョー田町）に場を移しました。

丹野修さん（47年園芸科）と篠原斉四郎さん（47年林学科）の司会により、新代表の山本さんの挨拶があり、来賓を代表して菅原さんから祝辞をいただきました。物故者への黙とうにつづき、齋藤秀一さん（30年農学科）の乾杯の発声により楽しく歓談したり、記念写真を撮ったりしました。また、来賓の船越さん、大沼さんからご挨拶いただいた後、村田利政さん（46年農工科）、成田一郎さん（45年農学科）、岩城さんから新旧役員の挨拶をいただきました。さらに、鈴木和彦さん（45年農化科）が毎月埼玉から山形に出向いて、山大ウエイトリフティング部再興のため尽力しておられる話には、感銘を受けました。なお、阿部先生からダダチャマメと現在手掛けておられる「東根リッチチェリーワイン」を、鶴窓会本部から山大農学部オリジナル純米大吟醸酒「燦樹（きらめき）」2本を、株式会社マルハチからお土産として「山形のだし」などおいしい漬物をご提供いただきました。品田謙一さん（H15年生物資源学科）に中締めの音頭をとっていただき、再会を期していったん散会しました。その後、有志による二次会、三次会で歌と鶴岡の思い出話に花が咲きました。

関東支部総会　平成28年6月5日（日）　於：山形大学東京サテライト

関東支部は、平成29年6月4日（日）に支部総会を開催致します。ご多数の参加をお待ちしております。
連絡先／山形大学農学部鶴窓会関東支部事務局　眞嶋　敏晴（S43年林学科卒）
〒240-0062 横浜市保土ヶ谷区岡沢町221 電話・Fax 045-341-7391 携帯 090-3146-9853
E-mail mashima@mx1.ttcn.ne.jp

健康で豊かな食生活の未来創りへ

昭和23年の創業以来、食品加工油脂製品の専業メーカーとして、マーガリンやホイップクリーム、カスタードクリーム、チョコレートなどの食品素材を通じて安全とおいしさをお届けし、健康で豊かな食生活の未来創りに貢献しております。

月島食品工業株式会社　www.tsukishima.co.jp/
本社：〒134-8520 東京都江戸川区東葛西3-17-9　TEL03-3689-3111（大代表）

追悼

小山浩正教授への哀悼の辞

農学部長　林田　光祐

平成28年3月10日に小山浩正教授が逝去されました。すでに半年が過ぎましたが、いまだに2号館の3階に足を運ぶと研究室から出てきて、声をかけ合えるような気がしています。

小山さんと私の出会いは彼が北大の学生の頃です。一緒にフィールド調査を行って、自然の厳しさや研究の楽しさを分かち合うこともありましたが、彼は北海道立林業試験場（当時）へ就職し、私も山形大学へと移りました。その後、平成14年に小山さんが山形大学農学部に准教授として着任することになり、今度は同僚としてのつきあいが始まりました。

小山さんが生物環境学科地域環境科学講座の地域生態学分野に来ることを決断させたのは、この分野の前身である林学科森林経理学講座の菊池捷治郎教授、北村昌美教授、高橋教夫教授と代々ブナの研究が受け継がれていたからと聞きました。小山さんは前の職場でブナの結実や更新に関する多くの研究成果をすでにあげていたので、それをブナの本場とも言える山形で続けたいと思ったのでしょう。

山大農学部へ来るとすぐに、演習林の谷地幅で行われてきたブナ天然林の動態研究の継続調査に加え、ブナの結実の研究を始めました。ブナの豊作年は5年から10年に一度しかないことから、すぐに解明できるわけではありません。小山さんの研究の特徴は、ブナ林としての豊凶だけでなく、個体をベースに調査を行っていたので、豊作年でもすべての個体が同調するのではなく、へそ曲がりの個体もあることや、葉を食害するウエツキブナハムシの大発生とそれに対するブナの葉の形質の変化や結実の豊凶との関係を解き明かすなど、ユニークな研究を次々と展開されていました。そして、豊凶性のメカニズムを明らかにするだけでなく、それを予測する方法を開発するといった実用的な成果にこだわっていました。この予測方法は山形県ですぐに採用され、毎年7月頃にはその年の秋のブナの豊凶の予測がHPで公表されています。昨年の大豊作はもちろん、今年の大凶作を早期に予測し、ツキノワグマの人里への大量出没に対する警戒を早期に呼びかけることに役立っています。

これらの研究は、研究室の学生・院生の卒論や修論としての成果でもあります。小山さんは学生たちにやる気を出させて乗せるのもうまい教員だったと思います。特に、小山研究室のプレゼンテーションはいつも抜群の出来でした。小山さんが送り出した卒業生・修了生は誰もが自信を持って社会で活躍されていることと思います。

10年ぶりにブナ種子の大豊作になった2015年の秋に、小山さんの闘病生活が始まりました。待ちに待った豊作年です。やりたいことは山ほどあったはずです。つらい闘病生活を送りながら、小山さんは授業と卒論・修論指導を最優先に考えて行動していました。その教育に対する姿勢には本当に頭が下がる思いでした。そして、もう一つのこだわりが森や自然のしくみとそれを知る楽しさを如何に多くの皆さんに伝えるかということです。闘病中も「農学の夕べ」等の公開講座でブナの豊凶の話をわかりやすく紹介するとともに、荘内日報に連載している「森の時間～山形大学農学部からみなさんへ～」の原稿を書き続けていました。小山さんが執筆した「森の時間」は今も連載されており、もう少し楽しめそうです。

小山さんは2015年の4月から農学部附属やまがたフィールド科学センター長に就任し、農学部を牽引していく人材として嘱望されていました。あまりにも早すぎる急逝に言葉がありません。心からご冥福をお祈り申し上げます。そして、最後にありがとう。

小山浩正先生を偲んで

山形県在住
高橋（伊藤）まり子
（平成15年生物環境学科卒）

小山先生

3月10日の深夜、小山先生急逝の知らせを受け、本当に信じられませんでした。小山先生とのお別れがこんなに早いなんて、考えてもいませんでした。当然のように、小山先生のご退官を仲間たちとお祝いするものだとばかり思っておりました。

私は小山浩正先生が助教授として山形大学に赴任され、初めてご指導いただいた学生です。小山先生に初めてお会いしたのは私たちが4年生に進級した平成14年（2002年）の4月でした。当時小山先生は37歳。若く、はつらつとした先生とのフィールドワークやゼミ、その中で触れる知識やアイディアはとても新鮮でした。

私は森林病害虫により荒廃した被害地の再生に興味を持ち、ナラ枯れ被害跡地の更新の可能性を卒業論文のテーマとしました。当初、通り一遍の研究動機を書いていたところ、小山先生に「被害地が痛々しい、どうにかしたい、という思いが元々の動機ならそれを書いたら」と言って下さったことを思い出します。私たちの研究に対する気持ちを大切にして下さっていたのだと思います。

卒業して13年が経ち思い出すことは、都合のいいことに卒業論文が書けない苦しさや小山先生の厳しい指導への恐怖はほんの少しで、多くが小山先生と研究室の仲間たちとの楽しい時間です。

研究室の飲み会もたくさんあったように記憶しておりますが、中でも卒業間近のある日、小山先生のご自宅にお招きいただき、手際良く手料理を作ってふるまっていただいたこと、ワインの味と香りがグラスで違うことをお話して下さったことなどが印象深く思い出されます。

享年50歳。本当に早すぎます。きっと小山先生の中には解き明かしたい森の中の秘密や伝えたい森の魅力がまだまだ沢山あったはずです。それが叶わなかったことが本当に残念でなりません。先生のお考えやアイディアが受け継がれて行くことを強く願っております。

小山先生、本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈りしております。

歩いたりしている

山形市在住
千葉（越智）温子
（平成18年生物環境学科卒
平成20年大学院農学研究科修了）

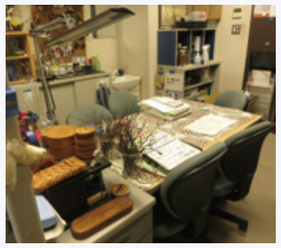
朝、研究室前の廊下で小山先生とすれ違う。おはようございます。と挨拶をする。当然、先生からもおはよう、と返ってくる。しかし、その声がするのは私のはるか後方だ。なにせ先生はものすごい速度で歩いているから、振り返るとすでに階段へと消えていたりする。歩く姿勢は前のめりで、歩幅もやけに大きい。難しい顔をしているのは、何か仮説を思案しているに違いない。普通に挨拶できた日は、よし。と心でつぶやく。なぜなら、挨拶する時に心が平穏なのは、研究課題がうまくいっている証拠だからだ。逆に、そうでない日は悲惨な朝になる。向かってくる先生。それを確認した私。昨日のゼミはひどかった。厳しいことを言われてしまった。そんな日の廊下はやけに長く、すれ違うまでの時間が苦痛だ。いっそ反対方向に逃げ出したくなるのだが、そんなあからさまな態度もとれない。ごにょごにょと挨拶をして、すごい速さで通り過ぎるのを待つ。

大学院生になると多少肝が据わってくるので、いつでも何食わぬ顔が出来るようになった。しかし、廊下と同じ状況は相変わらず健在で、むしろ顕著だ。早く論文を書かなければ、書いて先生に提出しなければ、と焦りながら過ごした日の夕方、ガチャッーと勢いよく研究室の扉が開く。先生が音速でクロックスを脱いで、わずか3歩で私の机まで到達する。そして私にたずねる。「論文は？」研究室の空気が張り詰める。私は「もうちょっとです…」と答えるが、ここでは完成した論文が無い限り、何を言っても無意味だ。先生が私の目を見据えるのは3秒。そして無言で踵を返し研究室を出て行く。待って、先生！と追いかけ、すがりつきたい衝動にかられるが、それをすることは許されない。大げさではなく、次に先生と会うのは論文を書き上げたときだ。

そんなふうに必死で書き上げた論文もあっけなく、提出した日の夕方には赤ペンだらけで返される。たまに添えてあるA4一枚は、私の文章を見かねた先生が書き上げてしまった修正原稿だ。もはや同じ内容の文章とは思われない。師匠の文章は完璧なので蛇足も付ける余地が無い。先生の家で飲んだときに見た壁一面の蔵書を思い出す。原稿を読み返し、かみしめるようにパソコンに打ち込んでいく。投稿する頃には、私の文章の原形はほとんど無くなっているが、それで構わない。これでようやく、完成に至るまでの苦労を、先生と冗談まじりに笑いあえるようになるからだ。

そんな経験を繰り返したせいか、ある癖がついた。先生を酒に誘うには、仕事で出世した、事業が成功した、結婚が決まった、など何らかの「手柄」が無いと手持ち無沙汰なのだ。小山先生と向き合う時間を喜びにするには、誇れる自分でないといけなかった。だから、まだ会いに行くには早すぎると、メールするのを断念したこともある。こんな日が来るのなら、未完成でも構わないから今あるものを見せに行けば良かった。

熱い突風が私の人生を揺さぶり、去った。振り返ったまま立ち尽くしていたが、教えてもらったものを信じて前を向くしかない。行き詰まったときは、職場の廊下を先生の真似をして歩いたりしている。



研究室前の廊下

小山先生の研究室